

トリオの黎明期 ~AMからSSBへ~

トリオ(現・ケンウッド)は1946年暮れに有限会社春日無線電気商会という社名で長野県内で産声を上げました。当時は高周波コイルなど、部品の製造メーカーでした。ここではまず同社の生い立ちをたどります。

見本

同社は有限会社から、1950年に「春日無線工業株式会社」に社名を変えましたが、そのころから受信機の開発を始めていたようです。

春日無線工業の第一号受信機が6R-4S(写真1)で、1952年発売のRFなしIF1段の5球スーパーにBFOを付けた6球の回路構成でした。

当時は民放ラジオの放送開始直後で“雨後のたけのこ”のように多くのラジオ・メーカーが、誕生した時期でもあります。このたくさんのメーカーがそれぞれキットや完成品を販売していたので、この6R-4Sもその中に埋もれてしまっていますが、春日無線工業の製品は同年に再開されたアマチュア無線や漁業無線をターゲットとしていたために、短波のハイ・バンドに対応していたことや6AT6によるBFOが付いていた点で他社の製品とは異なっていました。

この6R-4Sは、『無線と実験』誌(誠文堂新光社)の通販セクションが同誌オリジナル・モデルではないのに販売したという珍しい受信機で、発売直後から注目されていたことがうかがえます。

歴史的銘機 9R-59/TX-88Aの登場

その後、春日無線工業はさらに通信機への志向を深めていきます。球を9球にしたことから9Rの名称を付けた高1中2の受信機9R-4(中短波あり)、9R-4X(中短波なし)に続いて、1955年には記念すべき第1号送信機、その名もTX-1が発売されました。TX-1は3.5/7MHzの20W AM/CW機です。

またこの年、春日無線工業は東京事業所を開設し、ガレージ・メーカーばかりの中でいち早く量産体制を整えました。なお、9R-4シリーズと類似の外観をもつ受信機は各社から作られていますが、これはとあるケース・メーカーが米国Hallicraftersの製品に似せた受信機キット用ケースを販売していたためで、初代機6R-4Sもこのケースを用いています。

1957年秋に、この双子の受信機は真空管をGT管からミニチュア管にマイナー・チェンジした9R-4J、9R-42Jとなり、同時に送信機TX-88も発売されました。TX-88は、やはり3.5/7MHzのAM/CW 10W機で、TX-1とは微妙に異なり、当時できた10W免許の新資格「電信級、電話級」をターゲットにしていました。

TX-88の終段は6AR5でケースは小型化されパネルは洗練されましたが、最大プレート損失8.5Wの6AR5でAMの10Wを絞り出していたわけですから、この送信機には少々無理があったようです。このリグが実際にはCW時に入力12~15Wで動作していることが読みとれる記事が、1959年12月の「電波科学」誌(日本放送出版協会)に掲載されていますし、『ピギナーズアマチュアラジオハンドブック』(誠文堂新光社)には終段を6AQ5に変えると入力16Wまで増力可能だが、電源がもたないかもしれないという記述が見られます。

さて、社名をトリオ株式会社に変えた翌1961年に、同社はアマチュア無線の歴史に残る銘機、9R-59とTX-88A(写真2、写真3)を発売します。それまでの単なる拡大表示とはまったく違う大きな横型ダイヤルで正確

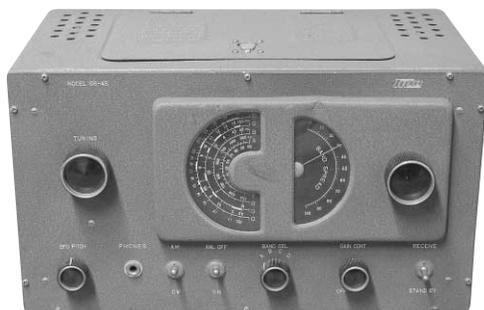


写真1 トリオの1号機6R-4S受信機



写真2 9R-59



写真3 TX-88A

表1 トリオのAM時代のアマチュア無線用受信機群

機種名	発売年	代表的周波数感度	選択度	本体寸法 (W×H×D)	球無しキット 価格(円)		完成品価格(円)		受信周波数(MHz)
6R-4S	1952	未公表	±10kHz, -38dB	330×220×300	13,200	11,500 (販売価格)	17,750	15,100 (販売価格)	0.55~1.6, 1.6~4.8, 4.8~14.5, 10~30
9R-4	1955	13μV, S/N 10dB	±10kHz, -60dB	385×235×200	13,500				0.53~1.6, 1.6~4.8, 4.8~14.5, 11~30
9R-42	1956	13μV, S/N 10dB	±10kHz, -60dB	385×235×200	13,500				0.55~1.6, 3.5~7.5, 7.5~15, 15~30
9R-4J	1958	13μV, S/N 20dB	±10kHz, -60dB	385×235×200	14,000		24,000		0.53~1.6, 1.6~4.8, 4.8~14.5, 11~30
9R-42J	1958	13μV, S/N 20dB	±10kHz, -60dB	385×235×200	14,400	(以下は 実勢価格)	24,500	(以下は 実勢価格)	0.55~1.6, 3.5~7.5, 7.5~15, 15~30
9R-59	1961	10μV, S/N 20dB	±10kHz, -65~93dB	380×180×250	18,500	14,900	33,000	26,400 10.5~30	0.54~1.605, 1.6~4.8, 4.8~14.5, 10.5~30
JR-60	1963	3μV, S/N 10dB	±10kHz, -65~93dB	430×195×255	29,900	23,900	38,300	31,000	0.55~30, 48.54 MHz (5 bands)
JR-200	1963	1μV, S/N 10dB	±10kHz, -30dB	325×195×225	14,500	12,500			0.54~1.605, 1.6~4.8, 4.8~14.5, 10.5~31
9R-59D	1966	2μV, S/N 10dB	±5kHz, -50dB	380×180×251	19,900 (球付)	14,900 (球付)	33,000	19,900	0.55~1.6, 1.6~4.8, 4.8~14.5, 10.5~30
9R-59DS	1970	2μV, S/N 10dB	±5kHz, -50dB	380×180×251			29,800	22,800	0.55~1.6, 1.6~4.8, 4.8~14.5, 10.5~30

は該当モデルなし、空欄は不明

に周波数が読めるスプレッド・ダイヤルを装備した9R-59と、30Wのプレート損失をもつ807を終段に据え、3.5~50MHzまでをカバーしたTX-88Aはまたたく間にハムの世界で普及し、他メーカーを圧倒しました。

当時の販売競争は熾烈だったようで、表1をご覧くださいとわかりますが、1960年以後しばらくの間、定価と実際の販売価格の間に大きな開きが生じていました。このような状態は1964年まで続きますが、このころには淘汰が進み、1965年以後の新製品のほとんどが現存する三大メーカーの製品となります。

ちなみに、この時期に送受信機の市場から消えていったメーカーとしては、三電機、JELECTRO、大栄、東京電機などがあります。

キット全盛だった当時の理由とは？

ところで当時、送信機と受信機はまったく別々の製品でした。送信は水晶発振の場合が多かったのですが、この場合まず送信機をキャリプレート動作にして受信機のダイヤルを合わせ、それから送信するのが通例でした。これはトリオの rigs でも同様で、受信機はミュート動作(送信時に受信回路を停止する)だけででき